「手の内」を見せるとオープンになるか (Ⅲ)

化粧品販売場面における美容液塗布部位と被施術者の性格特性が気分と認知に与える効果

○杉山東子¹・引間理恵¹ (非会員)・山本佑実²・本元小百合²・菅村玄二³

(¹花王株式会社感性科学研究所・²関西大学大学院心理学研究科・³関西大学文学部)

キーワード：身体化認知, 性格特性, 化粧

Can Showing Your Hand Make You Open-Minded? (3)

Haruko SUGIYAMA¹, Rie HIKIMA^{1,*}, Yumi YAMAMOTO², Sayuri HONMOTO², and Genji SUGAMURA³

(¹ Kansei Science Research, Kao Corporation, ² Graduate School of Psychology, Kansai Univ., ³ Faculty of Letters, Kansai Univ.)

Keywords: embodied cognition, personality trait, beauty treatment

目 的

「手の内を見せる」という身体メタファーが、心理的に他者に対して心を開くことを表すように、手の内はある種の自己開示を表す身体部位である (春木, 1988)。既に我々は、模擬化粧カウンセリング場面で、「手の内」を見せる姿勢をとり美容液を塗布するマッサージを受けることによって、被施術者自身の気楽さ気分が増し肌に対する自己評価が高まるといった、気分や自己認識に及ぼす効果を見出している (c.f. 研究 (I) 山本他, 2017; 研究 (II) 本元他, 2017)。これらは、広い意味で、自己が開放的になっている可能性が推察される。

一方で、体の内側は他者に触れられることに抵抗を感じ得る部位でもある (益谷, 1991)。他者に「手の内」をさらす姿勢は抵抗感や緊張感を生み、自他への認識が悪化する可能性もある。こうした身体化認知の違いを規定する要因として、環境や文脈などの生態学的要因の他に、行動主体者の性格特性が考えられる。実際、胸や腕を開いた姿勢によって開放的な気分が生じるものの、姿勢による感情変化は個人差要因にも影響されることが報告されている (菅村ら, 2016)。本発表では、山本他 (2017)、本元他 (2017) に続き、マッサージを受ける部位と個人の性格特性の違いが、気分や自己の認識に及ぼす影響を検証した。

方 法

参加者 女子大学生 60 名 ($M=19.4$ 歳, $SD=1.3$)

手続き 実験は、接客カウンターを模した実験室で行われた。参加者と面識がない女子大学生 2 名が、美容マッサージの指導を受け、施術者役として協力した。参加者はまず、施術前の気分と、自身の腕および顔の肌状態に対する主観的な印象について評定した。次に、施術者の誘導により、参加者のうち 30 名が腕の内側 (手の内)、残り 30 名が腕の外側を見せる姿勢になるよう両腕を上向きまたは下向きにして、美容液を手首から前腕までに塗布するマッサージを受けた。その後、施術後の気分と腕および顔の肌状態について評価した (前半)。併せて自己開示のしやすさ、施術者に対する親愛感、自身の性格特性を評価した。同様の手続きを施術者および腕の上下の向きを入れ替えて行った (後半) が、本報告ではこれらの分析は割愛した。

評価項目 (1) 気分: 安静・リラックス, 幸福・満足, 爽快・リフレッシュ, 気楽・気軽, 疲労・眠気の 5 因子各 3 項目, 計 15 項目について、どの程度感じるかを 4 段階で評定させ、因子ごとに平均した。(2) 肌の評価: 手の肌および顔の肌それぞれについて、良さ、好ましさ、満足度を -3 ~ +3 の両極尺度で自己評価させ、平均した。(3) 性格特性: Big Five の 5 因子 (外向性, 協調性, 勤勉性, 神経症傾向, 開放性) について、2 項目ずつ計 10 項目を準備し、当てはまり度を 1 ~ 7 で評定させた。

結果と考察

気分 5 因子および手の肌、顔の肌の評価の 7 評価について、施術後から施術前の得点を減じて変化量を算出した。性格特性は因子ごとに 2 項目の得点を合算した。自己開示に関連する性格特性として、外向性と神経症傾向に着目した。

外向性得点の平均値 8.77 を基準に、9 点以上を高外向性 (内側 14 名, 外側 18 名), 8 点以下を低外向性 (内側 16 名, 外側 12 名) として対象者を分割し、それぞれの評価について 2 (群: 手の内側・外側) $\times$ 2 (外向性: 高・低) の分散分析を行った。安静・リラックスの評価で交互作用が有意であり ($F[1, 59] = 6.68, \eta^2 = .10, p < .05$), 外向性の高い人が外側に施術を受けた場合 ($F[1, 59] = 7.29, \eta^2 = .11, p < .05$), 安静・リラックス気分が向上しないことが示された。

神経症傾向得点の平均値 10.02 を基準に、11 点以上を高神経症 (内側 11 名, 外側 16 名), 10 点以下を低神経症 (内側 19 名, 外側 14 名) として対象者を分割し、それぞれの評価について、同様に分散分析を行った。安静・リラックスの気分評価で神経症傾向高低の主効果 ($F[1, 59] = 5.77, \eta^2 = .08, p < .05$) および交互作用が有意であり ($F[1, 59] = 11.04, \eta^2 = .15, p < .01$), 神経症傾向が低い人が外側に施術を受けると安静・リラックス気分が向上しないことが示された (Fig.)。気楽・気軽の気分評価においても交互作用が有意であり ($F[1, 59] = 4.12, \eta^2 = .07, p < .05$), 神経症傾向が低い人で外側に施術された場合に、気楽・気軽の気分向上が認められないことが示された ($F[1, 59] = 6.42, \eta^2 = .10, p < .05$)。疲労・眠気についても交互作用が有意であり ($F[1, 59] = 5.69, \eta^2 = .09, p < .05$), 外側に施術を受けた神経症傾向が高い人は疲労・眠気が改善しなかった ($F[1, 59] = 4.84, \eta^2 = .08, p < .05$)。

「手の内を見せる／見せない」という姿勢は、性格特性の違いによって、特定の気分異なる影響をもたらす可能性が示唆された。化粧品販売場面で美容液をマッサージするという文脈においては、手の内側への施術が推奨されると考えられる。一方で他者への認識や、手・顔の肌の認識についてはこうした影響が認められず、身体化メタファーと性格特性の影響が及ぶ範囲は限定的である可能性も示唆された。

Fig. マッサージ部位および神経症傾向高低で比較した気分評価